

初年次日本人大学生が作成した 発表資料の形式に関する問題点

辻本 桜子
TSUJIMOTO Sakurako

1. はじめに

浅田 (2012) は大学および大学院への入学前の留学生に対して PowerPoint によるスライド作成の指導をしているかどうか、日本語教育機関に対し調査を実施している。その結果、指導を行っている機関は 23 校中わずか 5 校 (21.7%) で、約 80% の機関が指導を行っていないということが分かった。そして、大学等への進学前に指導を行わない理由には、スライド作成ができなくても問題ない、大学からで十分である等の意見が挙げられていた。一方で、大学入学前の日本の高等学校の事情について、茂住 (2015) は、日本では 2003 年度から「情報」科目が設置されており、「大学に入学してくる日本人学生は全員 PowerPoint の使用経験があると言っていい」と述べている (p.16)。そのため、「もちろん、すべての日本人学生が十分なスキルを持っているとは言えないが、少なくとも留学生よりはその操作に慣れている」とし、日本人学生との経験差を埋めるため、初年次留学生に対するスライド作成指導の重要性を説いている (p.16)。しかし、筆者が担当する初年次後期開講科目の「日本語表現 T2」(以下、T2) では、毎年必ず「初めてスライドを作成した」、「初めて (人前で) 発表をした」という日本人学生がいる。実際に PowerPoint の操作に関する質問を受けることもある。また作成され提出されたスライドを見ても、操作に不慣れな様子の学生がおり、習熟度に差があることが分かる。そのため、茂住 (2015) の主張に反して、日本人学生の中にも大学入学前に PowerPoint の使用経験がない者がいると予想できる。また、たとえ使用経験があったとしても、習熟度に差があり、熟達者が多数派を占めるわけではない。したがって、初年次留学生だけではなく、初年次日本人大学生にとっても、スライド作成は日本語科目の中で重要な指導項目になり得ると筆者は考える。

それでは次に、スライド作成の指導が重要であると仮定して、指導時にどのような点に気を付けたら良いのか。これまでに大学、大学院に在籍する留学生が作成したスライドの問題点については、仁科 (2017) で指摘されている。大学の初年次留学生を対象としたスライド作成指導の実践報告には、茂住 (2015) がある。しかし、初年次日本人大学生が作成するスライドの問題点について指摘された研究、指導の報告は管見の限り見当たらない。

そこで、本研究では初年次日本人大学生を対象にスライド作成上の問題点について調査を行うことにした。そして、得られた結果を今後の初年次日本語科目での指導時に役立てたい。

ところで、ここで、本研究で扱う「発表資料」の定義と、研究対象の範囲の限定をしておきたい。発表資料には Word 等で作成した資料もあるが、その作成方法については、現在のところ「日本語表現 T1/T2」では扱っていない。当該科目において「発表資料」「レジュメ」とはシラバス、テキストを通して、PowerPoint で作成したスライドのことを指している。そのため、本研究で扱う「発表資料」も PowerPoint で作成したスライドに限定する。

次に、通常、作成されたスライドの評価は、主に内容面と形式面の 2 つの側面から行われる。しかし、本研究では、対象は内容には踏み込まず、形式上の問題点のみとする。初年次日本人大学生が作成したスライドは、アカデミックな場面での使用に適したものであるか。問題があるとすれば、どこにあるのかに注目する。

2. 調査の概要

2.1 調査の方法

調査は、作成されたスライドと、スライド作成に関するアンケート調査により行う。これまでのスライドの問題点に関する調査には、前述の留学生を対象とした仁科 (2017) がある。仁科 (2017) では課題文として 2 つの口述原稿が用意され、どちらか 1 点についてのスライドを作成すること、スライドの枚数、デザインは自由という指示が与えられていた。その結果、調査対象者により選択した課題文が異なり、作成したスライド枚数も異なっていた。用意された課題文は、1 点は発表の導入部分で、1 点は結果と考察の部分であった。口述原稿の内容が異なれば、作成するスライドに差が生じるのではないかと。また、複数のスライドを分析の対象にすると、同じ学生の作でも、このスライドでは適切であったが、このスライドでは不適切であったと、スライドごとに差が生じた場合、問題点の把握が困難になるのではないかと。以上の懸念を考慮し、本研究では対象者全員に同じ課題文を読解させ、その内容についてのスライドを全員 1 枚だけ作成させ、問題点の比較、考察をすることにした。

2.2 調査の対象者

調査の対象者は、「T2」受講中の愛知淑徳大学の初年次大学生（以下、学生）とした。筆者が担当する当該科目の受講生 147 名のうち、スライドおよびスライド作成に関するアンケート両方の提出者で、なおかつスライドの研究使用の許諾の得られた 138 名のみを対象とした。

2.3 調査の時期

調査の時期は、2020 年度後期の「T2」開講中の 2020 年 12 月から 2021 年 1 月であった。

2.4 調査の内容

調査対象となるスライドを提出する授業は、「T2」の第 13 回授業で、授業テーマは「発表資料を作成する」である。授業内容は、テキストに掲載されているスライドの問題点を確認し、次に分かりやすいスライド作成に必要な工夫について理解すること。授業は講義形式で進め、その場でパソコンを使用したスライド作成の演習は行わない。調査対象のスライドは第 13 回授業の課題として提出されたものである^(注1)。調査の実施条件と調査対象の課題文は、以下の通りである。

- ・ 調査の実施条件：作成場所は教室外。時間制限なし。監督者なし。PowerPoint を使用して作成したスライドを Microsoft Teams の「T2」チームの課題提出チャンネルにて提出する。
- ・ 調査の課題文：効果的なプレゼンテーションを行うためのポイントをまとめて発表をすることになった。全体構成のうち、「4.1 ビジュアルハンドの役割」の部分の資料（スライド 6 ページ目）を、以下の口述原稿に即して作成せよ。スライドは 1 枚にまとめること。
《発表題目》効果的なプレゼンテーションのために
《全体構成》1. プレゼンテーションとは、2. スライド作成上のルール、3. 伝わりやすい口述表現のポイント、4. ビジュアルハンド（4.1 ビジュアルハンドの役割、4.2 ビジュアルハンドの注意点）、5. プレゼンテーション成功の秘訣

《口述原稿》「4.1 ビジュアルハンドの役割」

「ビジュアルハンド」とは、話に合わせて手を動かすことで、視覚に訴える手法のことです。人は動いているものを目で追う習性があるので、プレゼンテーション中にビジュアルハンドを用いると、聴衆の視線を誘導することができます。ビジュアルハンドの種類として、すぐに実践できるものを 3 点紹介します。（中略）これらのビジュアルハンドを駆使することで、聴衆の注意を引きつけることができます。

しかし、ビジュアルハンドを使う場合には注意すべき点もあります。

（『日本語表現T2』第10版オンライン授業用, p.57）

3. 調査の結果

3.1 アンケート調査の結果

図 1 はアンケート調査で「大学入学前のスライド作成経験の有無」について尋ねた結果である。

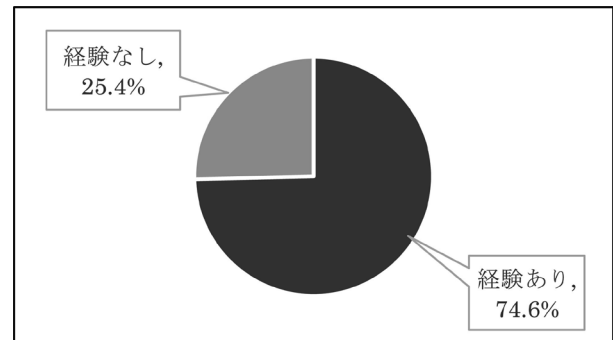


図 1 大学入学前のスライド作成経験の有無

図 1 に示した通り、138 名中、74.6%（103 名）の学生が「大学入学前にスライド作成の経験あり」と回答した。未経験者は 25.4%（35 名）であった。このように使用経験の方が多数であったが、一方で約 4 名に 1 名は大学入学前には使用経験がないことが分かった。

次に、図 2 は大学入学前からのスライド作成の経験回数を尋ねた結果である。「今回の調査のスライドは、大学入学前から数えて何回目の作成になるのか」を尋ねた。

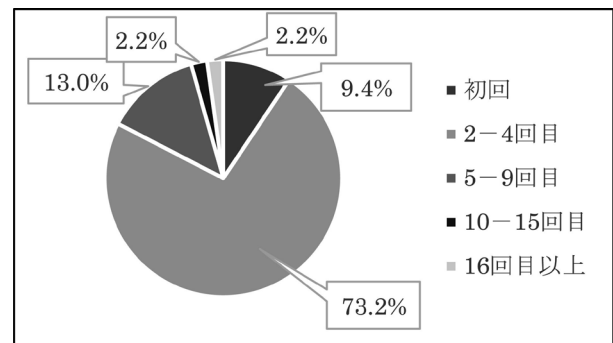


図 2 大学入学前からのスライド作成の経験回数

図 2 に示した通り、今回のスライド作成が大学入学前から数えて「初回」の学生が 9.4%（13 名）、「2-4 回目」の学生が 73.2%（101 名）、「5-9 回目」が 13.0%（18 名）、「10-15 回目」が 2.2%（3 名）、「16 回目以上」が 2.2%（3 名）という結果になった。特に大学入学後約 9 か月を経た調査時期に、初めてスライド作成をしたという学生が 9.4% いたことは特筆すべきである。指導時にはまったくの初心者があることを念頭に置くべきである。また、作成経験がある学生も回数を尋ねた結果、「2-4 回目」が 73.2% と経験が少ない学生が多数を占めることが分かった。

3.2 スライド分析の結果

3.2.1 分析項目

分析の項目は、仁科（2017）と「T2」第10版オンライン授業用テキスト「第9章発表資料を作成する」に掲載されている「レジュメに必要な条件や工夫」（p.55）のポイントと、筆者のこれまでの初年次学生の指導経験から、以下の10項目を設けた。

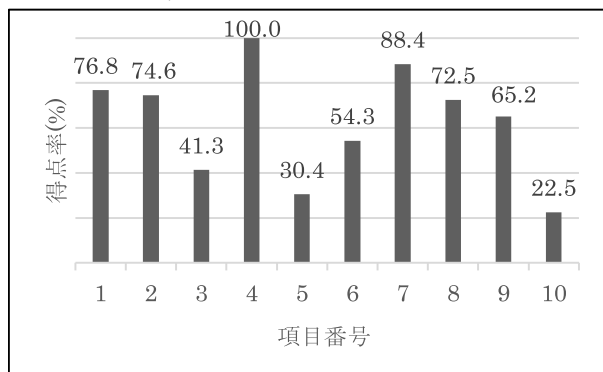
表1 スライドの分析項目

番号	項目
1	節番号があるか
2	節タイトルがあるか
3	ページ番号があるか
4	フォントが適切であるか
5	フォントサイズが適切であるか
6	視覚効果が施されているか
7	説明が箇条書きできているか
8	説明の前に小タイトルがあるか
9	1トピック=1スライドになっているか
10	デザイン、色使いが適切であるか

3.2.2 分析結果

分析は3.2.1の表1に示した項目、1項目につき1点を加点して行った。表2は項目ごとの得点率を示したものである。

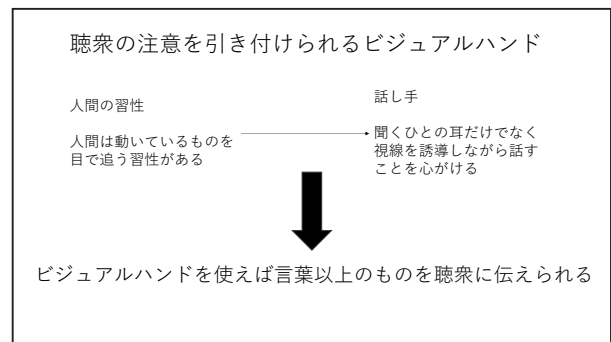
表2 スライドの分析結果



まず、得点率が高かった項目から見ていく。ここでは紙片の都合上、上位4位までを取り上げる。得点率1位は項目4「フォントが適切であるか」であった。スライド中、1ヶ所でもフォントの選択が不適切であった者は皆無であり、得点率は100%（得点者138名）であった。2位は、項目7「説明が箇条書きできているか」で、得点率は88.4%（122名）であった。課題文をそのまま長文で書き写す者はほぼ見られず、キーワードを抜き出すこと、要約し箇条書きにまとめることができていた。3位は、項目1「節番号があるか」で、得点率は76.8%（106名）であった。次いで、項目2「節タイトルがあるか」

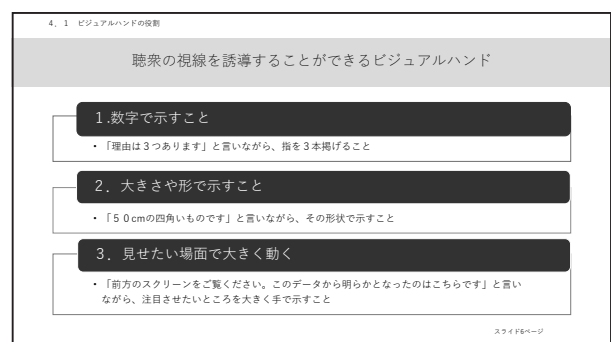
は得点率が74.6%（103名）で4位だった。多数の者が節番号、節タイトルをスライドに含めることができていたが、別の見方をすると、節番号、節タイトルの未記入者が23.2%、節タイトルの未記入者が25.4%いたとも言える。さらに、節番号と節タイトルで得点率に差があったことから、節番号の記入者の中に、節タイトルの未記入者がいたことが分かる。必ず両者を共に書くよう指導する必要がある。

次に、得点率が低かった項目について下位4位までを挙げる。得点率の下位1位は項目10「デザイン、色使いが適切であるか」で、得点率は22.5%（31名）であった。以下に、デザインがシンプルすぎる、もう少し工夫が必要だと判断した学生の作成例を紹介する。白黒掲載では伝わりづらいが、使用色が赤黒青の3色で、フォントサイズもあまり変化がないため単調な印象を与える。



学生作成例1

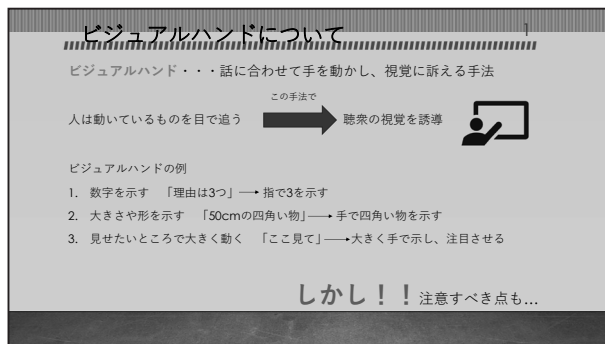
下位2位は項目5「フォントサイズが適切であるか」で、得点率は30.4%（42名）であった。スライド中、1ヶ所でもフォントサイズが不適切な箇所があれば、加点しなかった。以下は学生の作成したスライド例である。全体的に文字サイズが小さいが、特に左上、右下の文字サイズが小さく、視認が困難である。



学生作成例2

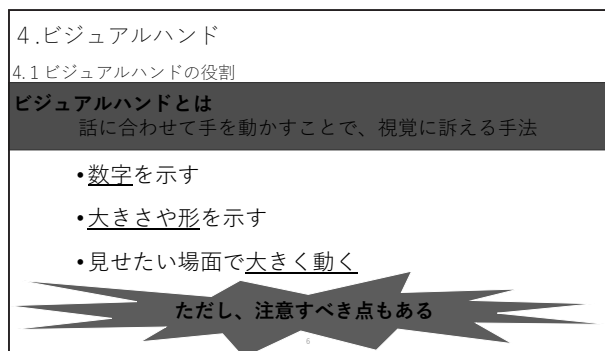
下位3位は項目3「ページ番号があるか」で、得点率は41.3%（57名）であった。本調査では、ページ数は課題文の中に含まれていたため、記載箇所を見逃した学生がいた可能性がある。しかし、実際に発表資料を作成する際にも、ページ番号は忘れずに記載すること、と言う

注意喚起はしておいた方が良好だろう。下位4位は項目6「視覚効果が施されているか」で、得点率は54.3%（75名）であった。なお本研究では、視覚効果が施されているかどうかは、最も伝えたいこと、つまり、節タイトルである「ビジュアルハンドの役割」の説明が最も目立つように書かれているかどうかを判断基準とした。以下に学生の作成例を挙げる。「ビジュアルハンドの役割」の説明よりは、下方の「しかし！！」が目を引きだろう。



学生作成例 3

もう一点、口述原稿の主旨以外が目立つように書かれていた例を挙げる。ページ下方の星形の図形の中には、「ただし、注意すべき点もある」と書かれている。それは次節「4.2 ビジュアルハンドの注意点」の内容である。



学生作成例 4

3.3 スライド作成の経験回数による得点結果

前節では、スライドの項目別得点結果について述べたが、本節では平均点と作成の経験回数による得点の差の検証をしたい。まず、表3に10点満点中の経験回数による平均点、標準偏差を示す。

表3 スライド作成の経験回数による平均点、標準偏差

	初回	2-4回目	5-9回目	10回以上
n	13	101	18	6
平均	4.7	6.3	6.8	6.3
標準偏差	1.4	1.8	2.0	2.2

表3に示した通り、「初回」の平均点は4.7点と「2-4回目」作成経験者の6.3点、「5-9回目」の6.8点、「10回以上」の6.3点よりも低かった。次に、得点の有意差

を検証するため、ノンパラメトリック検定のクラスカル=ウォリス検定を行った。それに先立つ χ^2 検定の結果、4群間には経験回数による有意な得点差があることが分かった($\chi^2(3) = 12.22, p < .01$)。そして、表4はクラスカル=ウォリス検定の結果を示したものである。

表4 クラスカル=ウォリス検定の結果

	初回	2-4回目	5-9回目	10回以上
n	13	101	18	6
平均順位	35.00	71.38	82.64	73.25

表4を見ると、「初回」よりも経験者の方が、平均順位が上であることが分かる。ただし、2回目以上の各群を比較すると、経験回数が多ければ多いほど平均順位が上がっているわけではない。つまり、いずれにしても初年次学生に対する明示的なスライド作成指導が必要である。

4. まとめ

本調査の結果から、大学入学後初めてスライド作成をする学生が25.4%いることが明らかになった。このことから初年次教育として、スライド作成を指導する意義があると考えられる。また、初年次後期になって初めてスライド作成をする学生が9.4%見られた。このような学生には、特に指導時に注意が必要である。指導上の留意点としては、デザインや色使いの工夫や適切なフォントサイズを選択等が挙げられる。現時点で「T2」では、一度の講義型授業後、即実践で発表のためのスライド作成にあたらせているが、より具体的な指導が必要である。

注

1 2020年度の「T2」は、COVID-19感染拡大の影響で、オンデマンド型授業を行った。講義資料、動画を配信し、課題をオンラインで提出させた。しかし、通常の対面授業の場合も、本課は講義形式でスライド作成のポイントを説明し、課題として教室外でのスライド作成を課すという形態である。

参考文献

- 浅田和泉 (2012) 「パワーポイントを使用したプレゼンテーションについて－日本語学校における実態調査および実践例－」『日本語教育方法研究会誌』第19巻第2号, pp.14-15
- 仁科浩美 (2017) 「研究発表スライド作成における経験の乏しい留学生の問題点－発表経験の多い博士後期課程の学生と比較して－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』第9号, pp.55-63
- 茂住和世 (2015) 「大学初年次留学生対象日本語科目におけるプレゼンテーション教育の授業設計」『東京情報大学研究論集』第19巻第1号, pp.13-27